

グラフで見る 十勝農業の歴史（４）

－作物（２）蕎麦・玉蜀黍・豆類（大豆，小豆，菜豆，豌豆）－

Historical outline about crops in Tokachi (4)

－ The buckwheat, corn, soybean, azuki bean, kidney bean, pea －

帯広百年記念館 編

はじめに

本稿は、十勝農業の歴史を農畜産物生産量のグラフから概観してみようと企画したものである。グラフのデータは、平成8年度から平成12年度まで帯広百年記念館の郷土史調査員であった井上寿が執筆し、平成13年度以降、その原稿の整理を進めてきた『十勝農業史』に所収されている統計値をもとにしている。

また、グラフに表現されている生産量の推移についての理解を助けるために、『十勝農業史』より関連する事項を抜き出し、要約したものを併記した。今回は作物のうち、蕎麦・玉蜀黍・豆類（大豆，小豆，菜豆，豌豆）を取り上げた。

グラフの見方

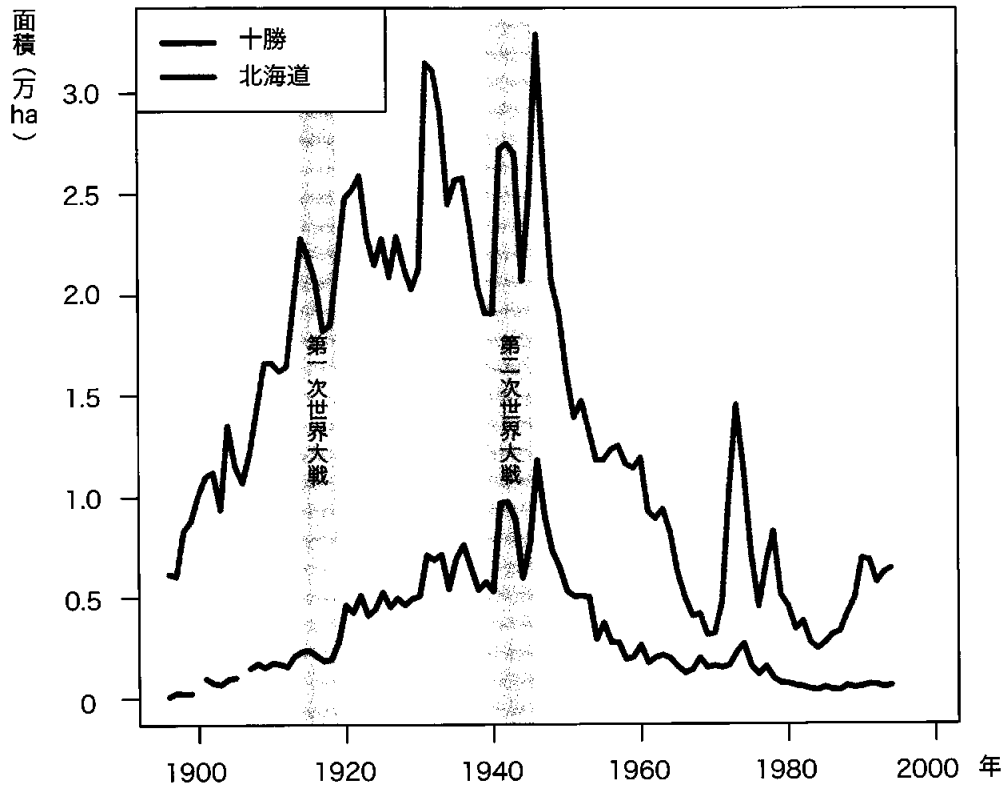
『十勝農業史』に所収されている農業生産量の統計値（明治29年（1896）～平成10年（1998））は、井上氏が様々な資料を参照し、まとめたものである。本稿では、井上氏が参照した統計資料をもとにデータを整理し、グラフ化した。

グラフは、北海道と十勝管内における作物の作付面積と収量を折れ線で表したものである。線が途切れている箇所は、データがない年である。また、作付面積の推移に関して理解を深めていただくために、主な出来事をグラフ中に併記した。

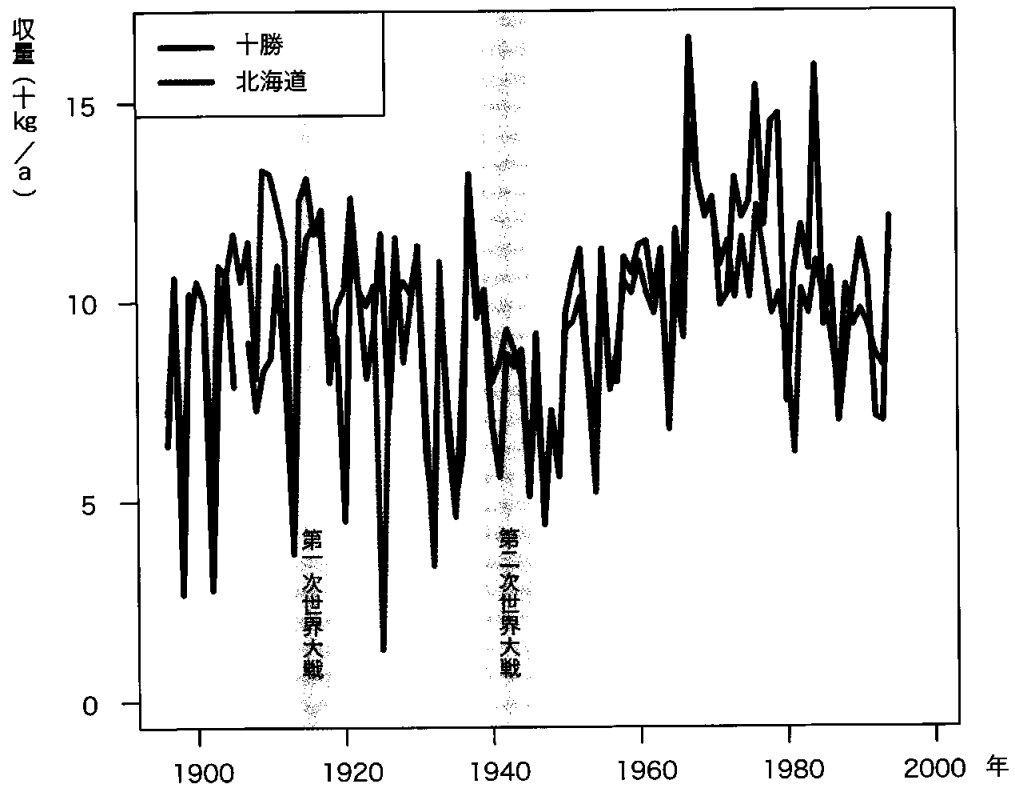
統計資料は、帯広統計・情報センター（旧：帯広統計情報事務所）にあるものを参考とした。ただし期間によって異なる資料を使用しているため、単位や調査基準が異なる。本稿の最後に掲載している統計表に、出典（下記参照）を明記しているので、細部に関しては留意する必要がある。作物の種類によっては統計資料が見つからず、グラフ化されていないものもあるが、ご了承ください。

《出典》 b：北海道農林水産統計50年の歩み 農林水産省 北海道統計情報事務所 平成9年12月
g：累年統計表 日高・十勝・釧路の作物統計 農林省帯広統計調査事務所編 1970年
h：日高・十勝・釧路 農作物累年統計 農林省帯広統計事務所 昭和51年3月
I：累年統計－作物編－（日高・十勝・釧路）農林水産省帯広統計事務所 平成7年3月

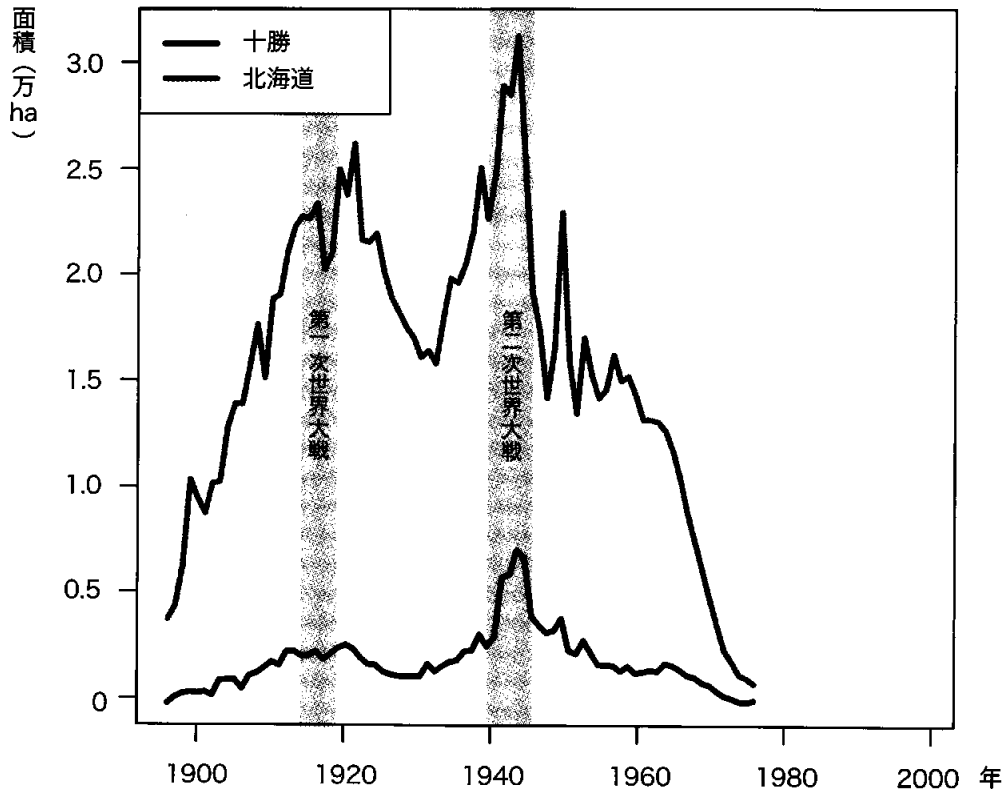
《凡例》 b：「－」 事実のないもの
g：「－」 該当数値のないもの
h：「－」 該当数値のないもの



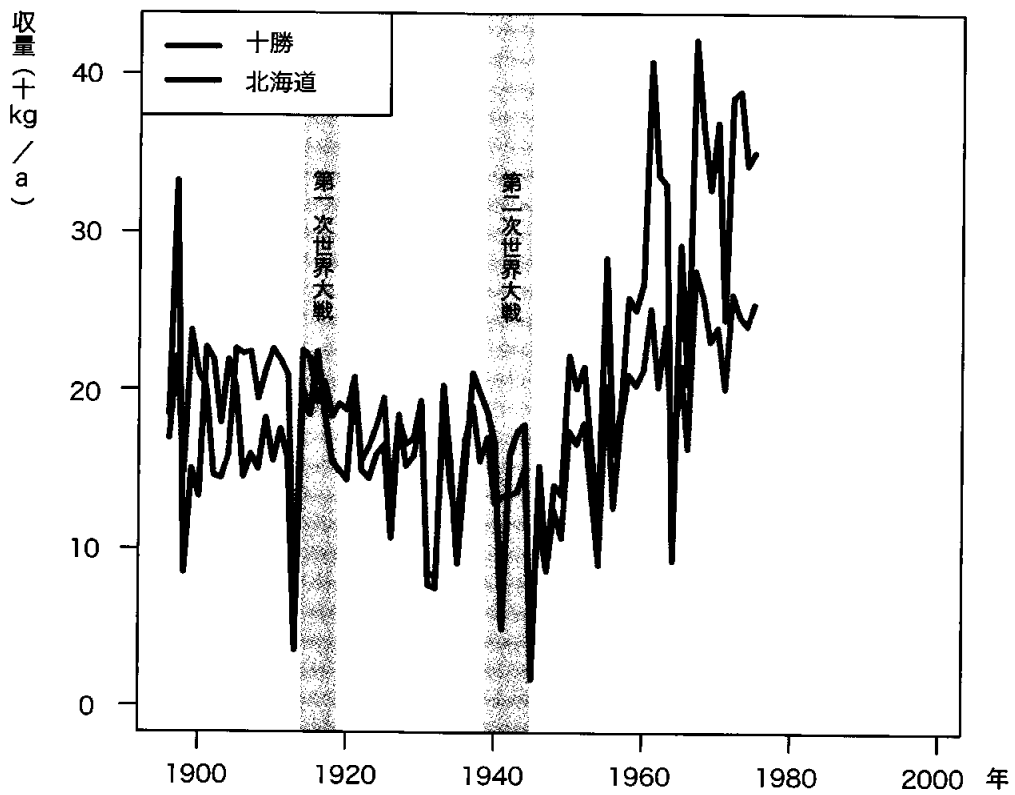
グラフ1：蕎麦の作付面積と主なできごと



グラフ2：蕎麦の収量

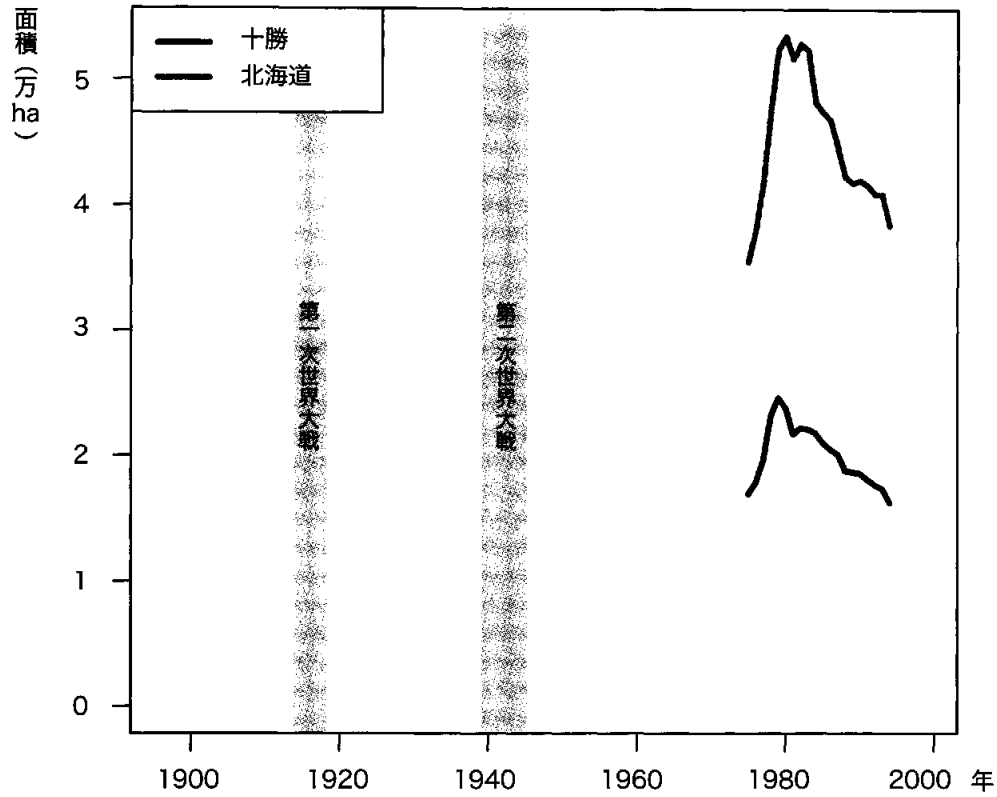


グラフ3：玉蜀黍の作付面積と主なできごと

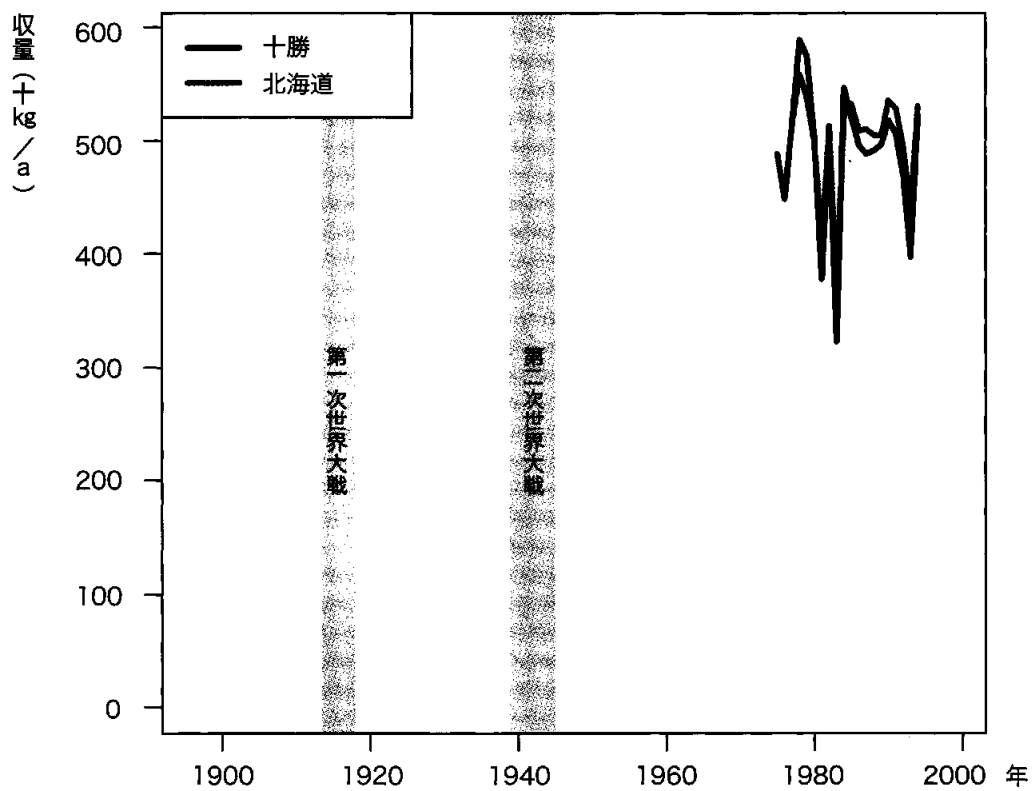


グラフ4：玉蜀黍の収量

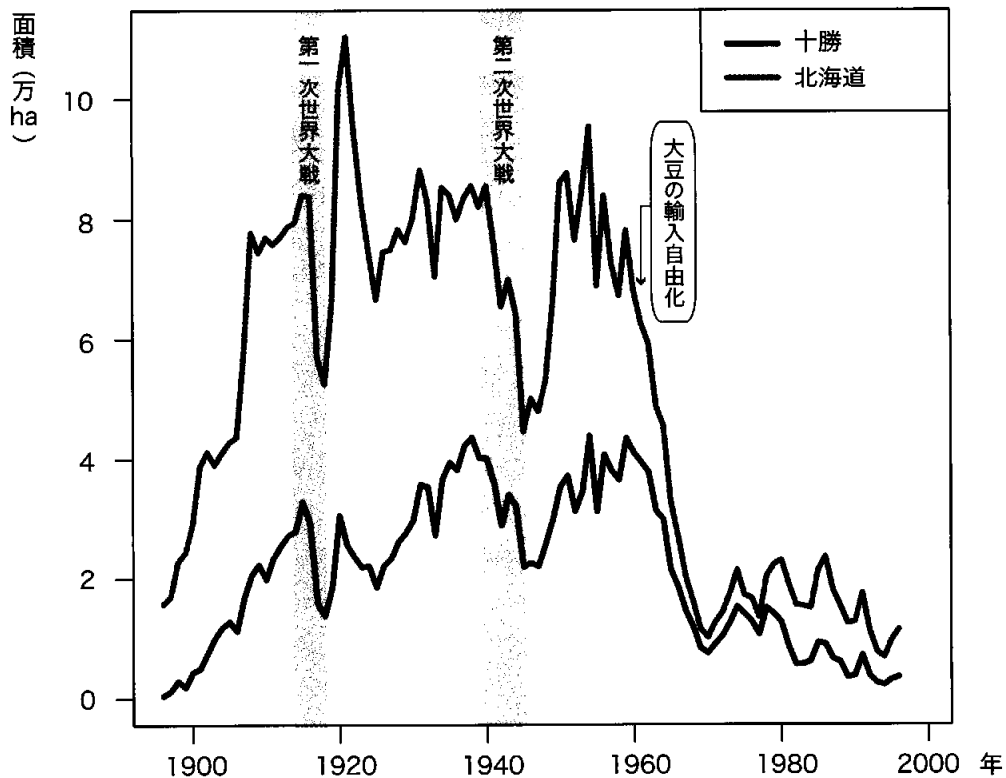
グラフで見る十勝農業の歴史（4）



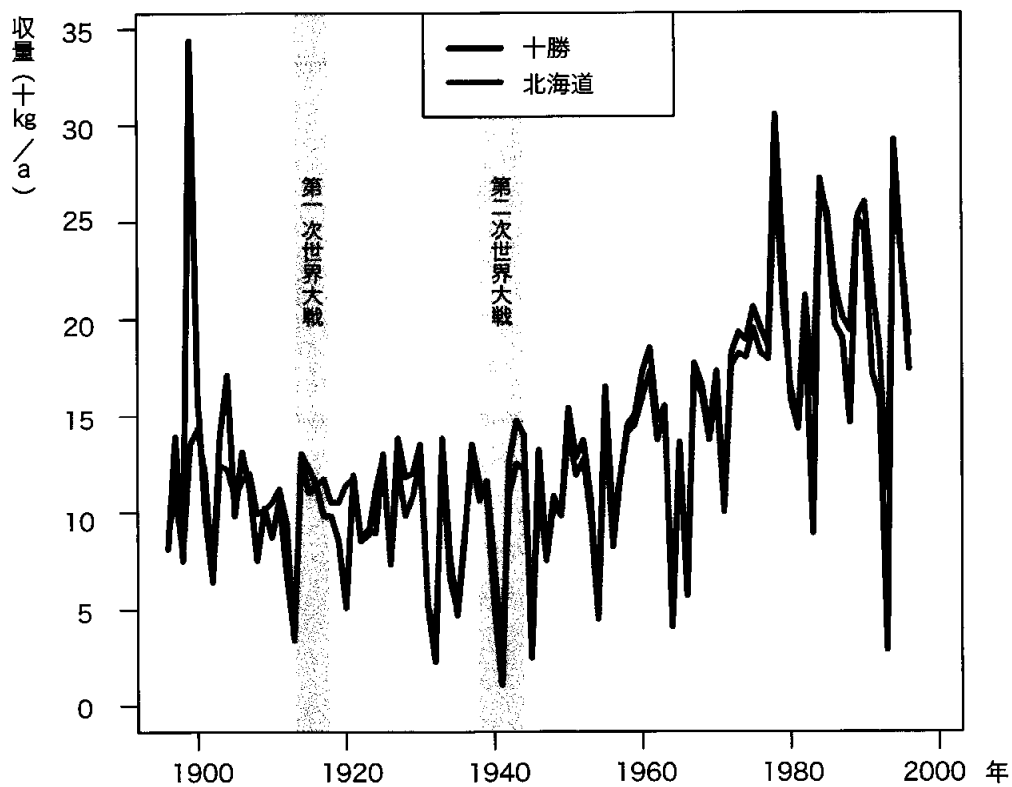
グラフ5：サイレージ用玉蜀黍の作付面積と主なできごと



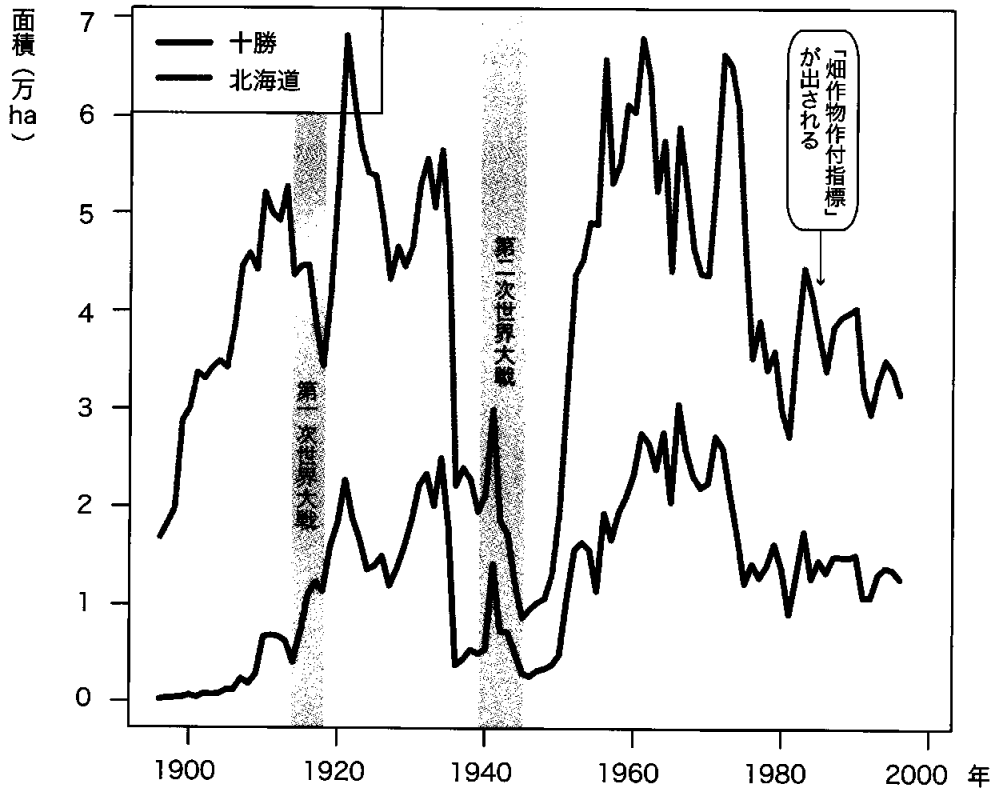
グラフ6：サイレージ用玉蜀黍の収量



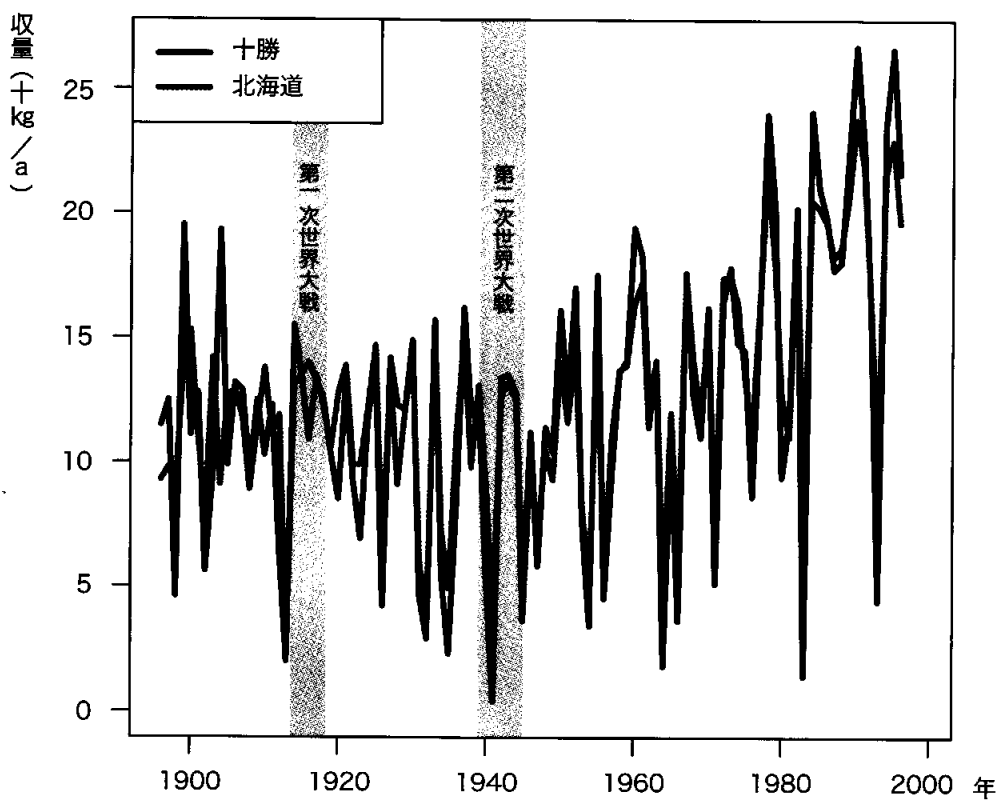
グラフ7：大豆の作付面積と主なできごと



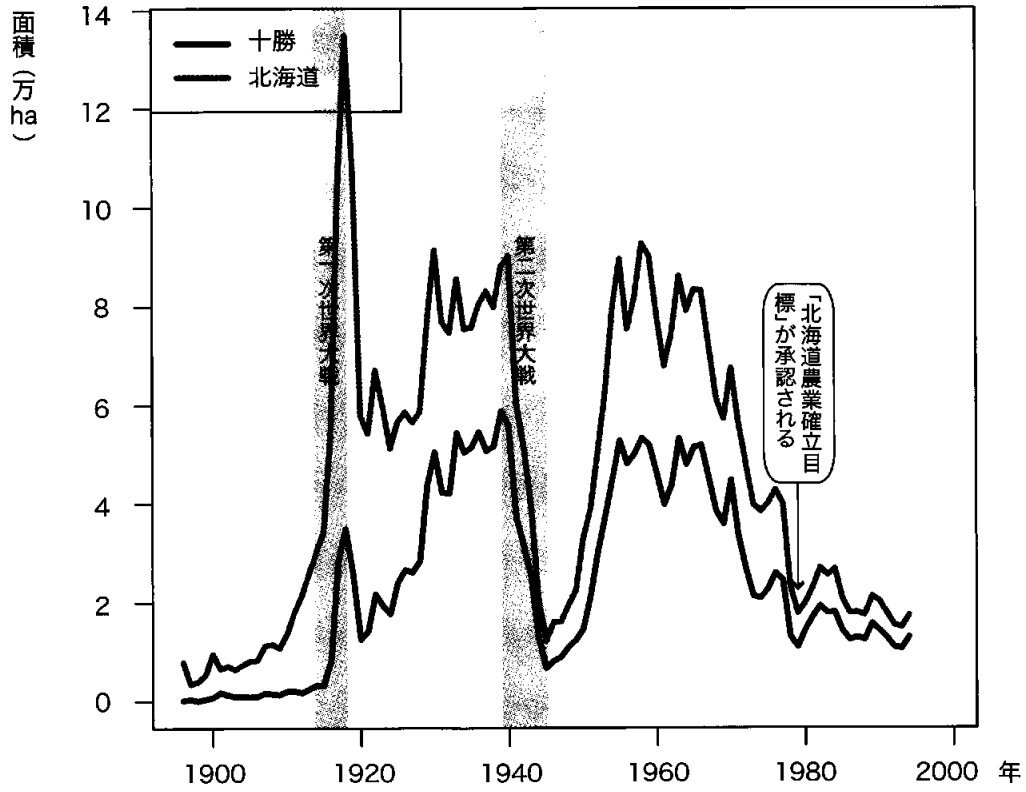
グラフ8：大豆の収量



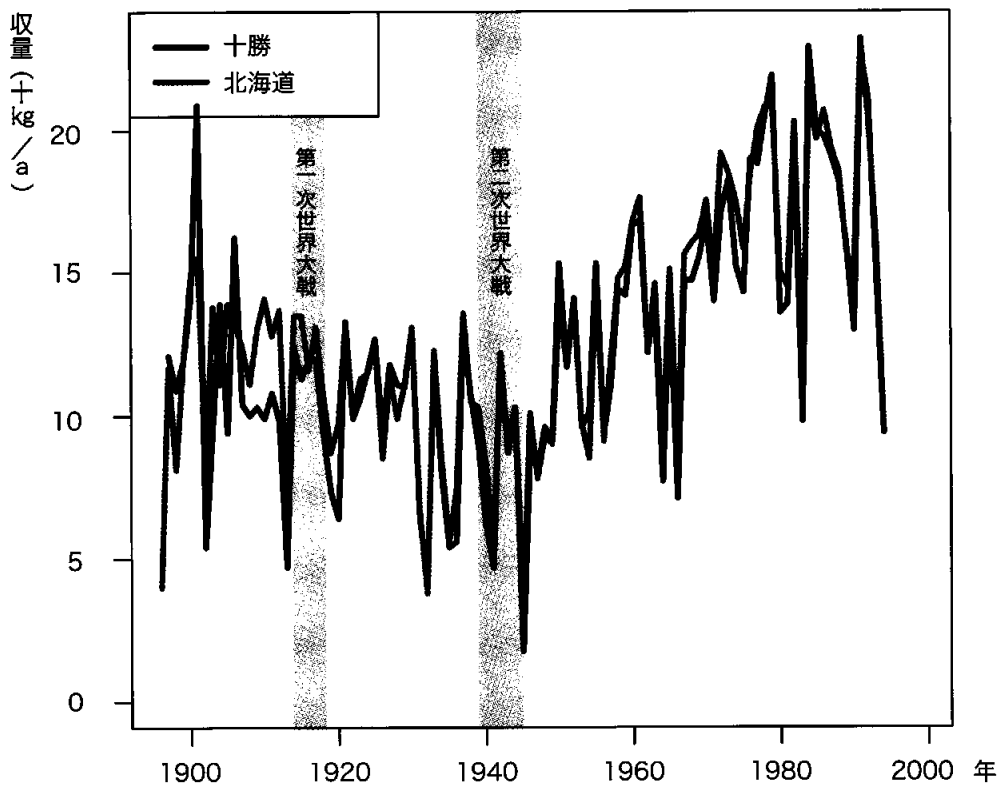
グラフ9：小豆の作付面積と主なできごと



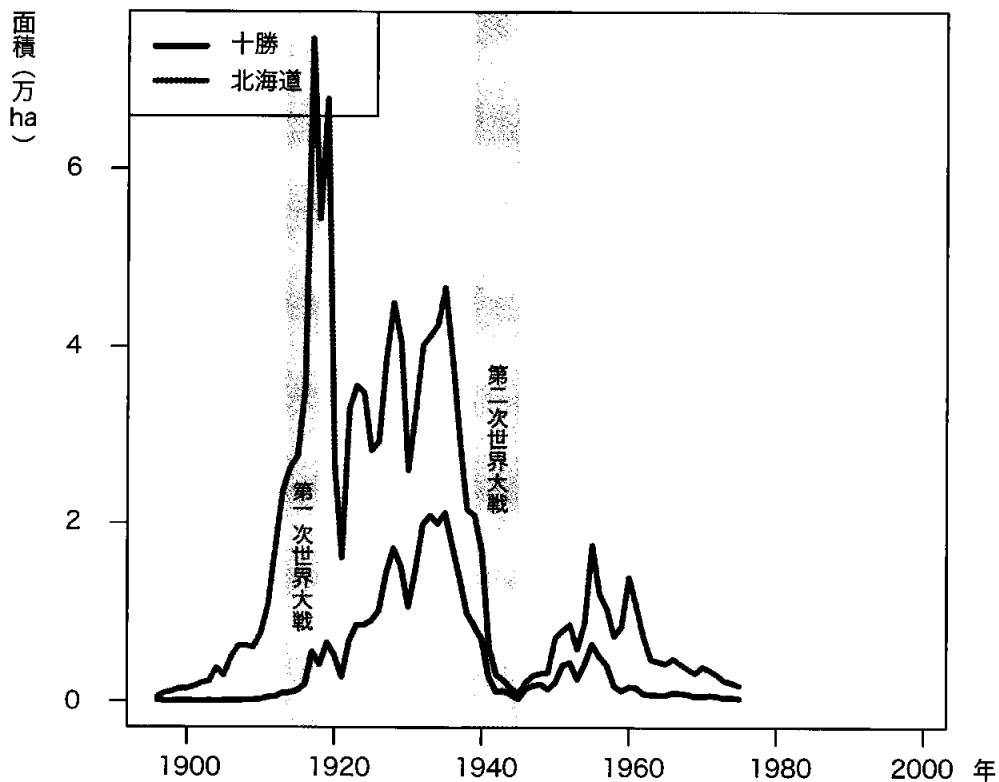
グラフ10：小豆の収量



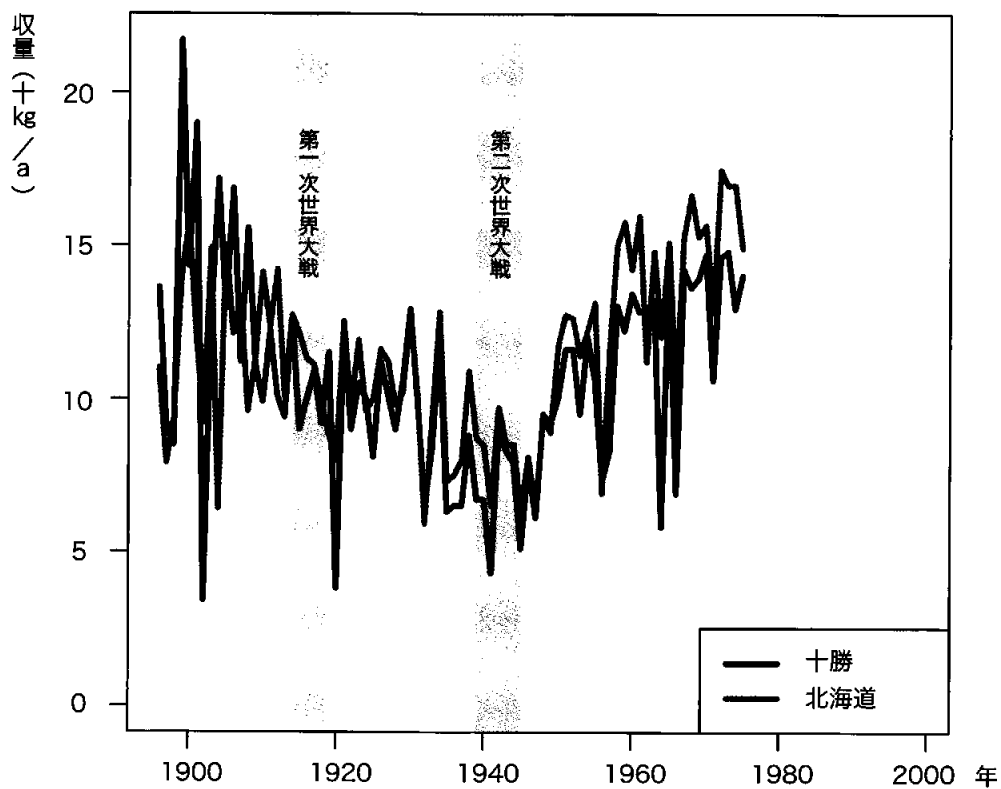
グラフ11：菜豆の作付面積と主なできごと



グラフ12：菜豆の収量



グラフ13： 豌豆の作付面積と主なできごと



グラフ14： 豌豆の収量

十勝農業の概要－作物（2）雑穀類〈蕎麦〉－

井上 寿 著「十勝農業史」

第3編 十勝農業変遷史, 第1章 作物栽培の経過, 第5節 稲類 より

蕎麦は痩せた土地で栽培可能で、連作に耐え、^{はしゅ}播種から収穫までの労力もかからず、100日ほどで収穫できるため^{しんこんち}新墾地に適した作物である。そのため入植当初から、自給用作物あるいは救急作物として全道各地で栽培され、十勝・根室・釧路・上川・石狩の順で作付面積が多かった。しかし蕎麦は主食ではなくあくまでも不作年の代用食だったため、開拓の進行とともに他の作物栽培が有利な^{ちゅうせきど}沖積土地帯では蕎麦の作付けは減少した。第二次世界大戦終了時まで、山麓・高台において自家用食糧作物として作付けされていたが、戦後、食糧事情が良くなるにつれて作付面積は減少していった。

十勝農業の概要－作物（2）^{とうもろこし}玉蜀黍－

井上 寿 著「十勝農業史」

第3編 十勝農業変遷史, 第1章 作物栽培の経過, 第5節 雑穀類・第8節 野菜類・第11節 飼料作物 より

〈北海道〉玉蜀黍の栽培は、明治初期に開拓使がアメリカから種子を輸入したことから始まった。開拓当初は、風土によく適したこともあって^{そば}麦・^{ひえ}蕎麦・^{あわ}稗・粟などとならんで主食とされ、作付面積は順調に増加した。このほかに、戦前は子実と茎が^{ふうじよがき}鶏・馬・乳牛の飼料に、戦中は穂の芯が軍用機の燃料原料に、また冬期には^{ふうじよがき}風除垣にと様々に利用され、重要な作物の一つであった。戦後は生食用のスイートコーンの需要が急増し、作付けが広がっていった。一方で従来の玉蜀黍は^{みつじょうぞう}密醸造や穂の^{ほうひ}包皮が^{ぞうり}草履に使われることもあったが、豊凶の差が大きく収穫の機械化がなされなかったため、昭和30年(1955)代には姿を消した。なお、スイートコーンは昭和46(1971)に輸入自由化がされている。

サイレージ用玉蜀黍は明治末期～大正初期に先進酪農家がアメリカから輸入した種子が一般に普及したもので、作付け当初の主体は道央・道南の酪農地帯であり、作付面積は乳牛の頭数に比例して増えていった。しかし、玉蜀黍栽培の技術は牧草に比べて機械化が遅れたため、昭和30年代後半から作付面積は停滞した。この頃から家畜飼料は大部分をアメリカからの輸入に頼るようになり、サイレージ用玉蜀黍の価格はアメリカの社会・経済状況に大きく影響されたことから、政府は昭和37～41年(1962～1966)に、トラクター、シエラの補助、一代雑種品種の普及、栽培技術の浸透などの玉蜀黍生産技術改善普及対策事業を行った。しかし、玉蜀黍は他の作物に比べて経済性が劣るため作付面積は減少し続けた。その後、ハーベスタ(収穫機)^{たいとうふく}と耐倒伏性品種の普及や、サイレージ用玉蜀黍の高栄養性・産乳効果の認識が高まったことによって作付面積は増加に向かい、昭和49年(1974)以降は自走式ハーベスタの導入によりその伸びは著しくなった。昭和55年(1980)年以降は減少傾向にある。

〈十勝〉十勝における玉蜀黍の栽培も開拓と同時に開始されている。明治17年(1884)の^{ばんせいしゃ}晩成社の記録に「4升7合を播種して4石1斗5升を収穫し(栽培面積は不明)、補食用としておおいに役立った」とあり、開拓農民にとって重要な食糧作物として作付けは急速に広がった。第二次世界大戦が始まると航空機燃料の原料としての需要が増加し作付けの奨励が行われたため、昭和20年(1945)の終戦時まで作付面積は高く保たれていたが、終戦とともに減少に転じた。その後、戦後の経済混乱が

おさまった昭和30年代に入ると畜産業の伸展にともなって家畜飼料として需要が高まり、作付面積は再び増加に転じた。昭和41年（1966）からは全購連（現全農）が国内の自給率を高めるために十勝管内に玉蜀黍集中指導集落を設置し、十勝農業協同組合連合会が事業を担当、十勝農試が技術指導をした。事業は約1ヘクタール／戸の作付けを行っている農家5戸を1集落とし、各集落にドライケージ・ハスカ・シエラなどを貸与、生産した玉蜀黍は輸入価格と同額で買い上げるというものであった。豆の作付け率が高く地力低下が問題となっていた十勝ではとても魅力的な事業であり最盛時には10農協が参加したが、他の作物にくらべて経済性が劣るためしだいに縮小し、昭和47年（1972）をもって中止された。

スイートコーンについては昭和3年（1928）に十勝農試が初試験を行ない、昭和24年（1949）には日本缶詰株式会社が帯広市において契約栽培を開始した。その後、食生活の変化にともなうスイートコーン缶詰の需要増や、昭和44年（1969）以降のスイートコーンハーベスタの導入によって栽培面積が大幅に拡大し、しだいに畑作農家の輪作体系に定着していった。昭和50年（1975）以降は缶詰の消費需要がさらに増えたため作付けも増加し、倒伏防止のための茎葉切除作業機（はいよう）の導入など機械化の進展もあって十勝の輪作体系に定着していった。十勝の主産地は芽室町で、ついで帯広市・音更町・幕別町・士幌町などが続く。

十勝農業の概要－作物（2）豆類（大豆・小豆、いんげん菜豆・えんどう豌豆）－

井上寿著「十勝農業史」

第3編 十勝農業変遷史、第1章 作物栽培の経過、第4節 豆類 より

【大豆・小豆】

（北海道）大豆は永禄5年（1562）に渡島国おしまこく亀田郡亀田村（現：函館市）において、小豆は元禄8年（1695）以前に松前において栽培された記録がある。それ以降は、日高地方ひやま、檜山地方しりべし、後志地方、札幌地方へと拡大し、栽培が容易なため幕末期にはさらなる広がりをみせた。

大豆はもともと主食の補完や味噌・醤油・納豆などの原料、家畜飼料として需要が高い作物で、北海道の大豆の作付面積は開拓の初期から急激に増加した。明治中頃になると中国や朝鮮から大豆の輸入が始まったが、北海道産の大豆は品質・風味ともに外国産よりも優れており、すぐに作付面積に影響することはなかった。しかし、しだいに価格の安い外国産の割合が増え、さらに第一次世界大戦中は輸出農産物である菜豆・豌豆・馬鈴薯の作付け増加も重なり大豆の作付けは減少に向かった。大戦後は、菜豆、豌豆の作付け激減と、肥料や家畜飼料となる大豆粕の需要の高まりによって大豆の作付面積は再び増加し大正10年（1921）がピークとなった。その後、中国方面からの輸入増によって作付けは一時減少したが、大正末期から回復した。第二次世界大戦に入ると労働力と資材不足による耕地の荒廃によって作付けは減少したものの、大戦後は、政府が食料不足を解消するため有利な統制価格を与えたことから作付面積は増加に転じた。その後作付面積は、小豆・菜豆・豌豆との兼ね合いで変動しつつ、昭和36年（1961）の輸入自由化を境に激減し、加えて、冷害やダイズ矮化病（わいか）の多発、交付金基準価格の減額によって作付面積の減少に一層拍車がかかった。

小豆は大豆に比べて冷霜害に弱く、栽培に多くの日照時間を必要とし、さらに価格変動が大きいなど作付けにおいてマイナス面が多いが、製餡・製菓原料としての需要が大きいため作付面積は明治31年（1898）以降順調に増加した。その頃の主産地は空知・上川地方で、その後、作付けは十勝地方へ移っていった。明治39年（1906）以降は開拓移民をはじめとした人口の増加による小豆の消費

増加にともない作付面積は急増したが、第一次世界大戦が始まると大豆と同じく、中国・朝鮮産の輸入の増加と、菜豆・豌豆の作付け増加に押され作付面積は一時減少、大戦後は上昇と下降を繰り返した。第二次世界大戦が始まると食料源となくいく小豆の作付けは再び著しく減少したが、大戦後、商品作物として販売価格上相対的に有利な小豆の作付けは急激に増加した。昭和50年(1975)、51年(1976)、55年(1980)、56年(1981)は冷害・水害により作付けが減少するなど、気候による影響も大きい。

〈十勝〉大豆は明治4年(1871)に静岡藩入植者が大津近辺で栽培した記録が残っており、^{ばんせいしゃ}晩成社は明治16年(1883)に栽培を開始している。明治30年代になると十勝は大豆の主産地となり、明治35年(1902)には十勝の畑面積の49%を占め、重要な商品作物として扱われるようになった。しかし大正時代に入ると、輸入大豆の増加や、菜豆の作付け増加に押され、十勝の作付面積の割合は10~20%へと低下した。その後、昭和12年(1937)には十勝が全道作付面積の50%を占めるまでに作付けは回復したものの、第二次世界大戦中は減少に転じ、昭和36年(1961)の輸入自由化ではさらに激減した。

十勝での小豆の栽培は、明治16年(1883)の晩成社によるものが最初である。主産地は当初、空知・上川だったが、第一次世界大戦後に十勝が道内一となった。しかし、昭和12年(1937)ころになると食糧作物の作付けに押され、小豆の作付けは全道的に減少へ向かった。それに加えて昭和28年(1953)に起こった冷害と台風による凶作で北海道全体の小豆の収量は激減したが、逆にその価値は高まり、「赤いダイヤ」とよばれ1俵1万円という高値で取引されるようになり、作付けは再び増加へ向かった。昭和41年(1966)には十勝の作付面積は過去最大となり全道作付面積の52%を占めたが、昭和46年(1971)より、空知・上川地方において稲作から小豆への作付け転換にともなって十勝の作付け割合は減少した。昭和55年(1980)、56年(1981)は冷水害が起これ、作付けはさらに減少したが、昭和57年(1982)から耐冷性・多収のエリモ小豆が普及したこと、小豆の作付けが奨励されたことを機に昭和58年(1983)より再び増加に転じた。その後、昭和60年(1985)に道農協畑作対策本部が計画的生産を目指して出した「畑作物作付指標」により作付けは安定したものの、平成元年(1989)と平成2年(1990)の大豊作では在庫が過剰になり25%の減反が行われた。平成5年(1993)には大冷害の影響で価格が史上最高の1俵9万円を超えたため、価格の安い中国産輸入小豆の利用が広まっていった。

【菜豆・豌豆】

〈北海道〉菜豆、豌豆は明治初期に海外から種子が輸入され、札幌農学校も試作を行っていた。しかし、明治初期は大豆・小豆に比べて菜豆、特に豌豆の栽培は少なかった。明治19年(1886)、北海道庁設置以後は各地の農事試験場で試作が行なわれるようになり、道南地方から日高・道央さらに道東・道北地方へと作付けが広がっていった。第一次世界大戦に入ると、海外からの需要も高まり作付けはさらに増加したが、戦後はアメリカにおける関税の値上がりやヨーロッパ産との競争のため輸出が減少し、それとともに作付面積も激減した。その後、大正11年(1922)のアメリカでの菜豆の不作と関税低下などによる輸出の増加により回復したが、第二次世界大戦が始まると農産物の外国への輸出停止、政府による価格統制、食料源となる大豆の生産に代わられるなどで、再び作付けは減少した。

菜豆については、戦後、海外輸出が再開され、小豆とともに販売価格上相対的に有利なため作付けは回復をみせたが、同時に過作などの弊害も出てきたため、昭和40年代に日本豆類基金協会によって豆類の生産調整が行われた。さらに、安価な外国産が増加したことによって菜豆の作付けは減少に転じた。昭和53年(1978)全道農協組合長会議で中央会策定の「北海道農業確立目標」が承認され、

供給過剰と暴落に対応するため菜豆のさらなる減反目標が出されている。

豌豆は菜豆よりも早くに作付けが減少したが、その理由としては、冷害に強いものの成熟期の湿害に弱く価格の変動幅が非常に大きい、さらに同一の畑では次に栽培するまでに7年以上の期間を空けなければならないなどがあげられる。

〈十勝〉明治11年（1878）の「^{とちこくさんぶつ}十勝国産物」、明治15年（1882）晩成社の^{すずきじゅうたろう}鈴木銃太郎の「帯広村滞留誌」に菜豆の栽培記録がある。大正4年（1915）の十勝の作付面積は北海道全体の9%だったが、その後増加し、大正7年（1918）になると北海道内で最も多い作付面積を占めるようになった。一時減少したものの、昭和5年（1930）から昭和15年（1940）までは再び増加に向かい、安定した。昭和20年代以降は十勝と網走が主産地となり、その後の動向は北海道全体と同様である。

豌豆についても北海道全体の動向とほぼ同じで、開拓とともに作付面積が増加、さらに第一次世界大戦で価格高騰により急増した。その後も作付面積の増加傾向はしばらく続いたが、第二次世界大戦で輸出が途絶えたため激減した。戦後は国内の需要の高まりによって増加に向かったが、主産地は網走と上川に移り、十勝の作付け割合は昭和35年（1960）には全道の12%まで落ち込んだ。加えて、栽培管理と収穫作業の機械化が困難なことから減少し続け、昭和51年（1976）以降作付けの記録はない。

表3：サイレージ用玉蜀黍の作付面積と収量

年	年次	北海道の作付面積(ha)	十勝の作付面積(ha)	北海道の収量(kg/a)	十勝の収量(kg/a)	出典
1896（明治29）年～1974（昭和49）年の間は資料なし						
1975	昭和50年	35300	17000	4870	4880	1
1976	昭和51年	38100	17900	4510	4480	1
1977	昭和52年	41900	19700	5150	5160	1
1978	昭和53年	47600	23200	5590	5890	1
1979	昭和54年	52500	24600	5380	5750	1
1980	昭和55年	53500	23800	4980	5010	1
1981	昭和56年	51700	21700	4100	3780	1
1982	昭和57年	52900	22200	5090	5130	1
1983	昭和58年	52400	22100	3690	3230	1
1984	昭和59年	48200	21800	5220	5470	1
1985	昭和60年	47400	21000	5330	5210	1
1986	昭和61年	46800	20500	5090	4960	1
1987	昭和62年	44600	20100	5100	4880	1
1988	昭和63年	42300	18800	5050	4910	1
1989	平成1年	41800	18700	5040	4960	1
1990	平成2年	42000	18600	5360	5180	1
1991	平成3年	41600	18100	5290	5060	1
1992	平成4年	40900	17700	4940	4880	1
1993	平成5年	40900	17400	4380	3970	1
1994	平成6年	38400	16300	5310	5230	1
1995（平成7）年～1998（平成10）年の間は資料なし						

表4：大豆の作付面積と収量

年	年次	北海道の作付面積(ha)	十勝の作付面積(ha)	北海道の収量(kg/a)	十勝の収量(kg/a)	出典
1896	明治29年	13700	412	88	81	g
1897	明治30年	16900	1190	109	139	g
1898	明治31年	22800	2860	78	75	g
1899	明治32年	24400	1820	135	344	g
1900	明治33年	29200	4300	143	161	g
1901	明治34年	38700	4850	120	99	g
1902	明治35年	41100	7390	64	65	g
1903	明治36年	39000	9880	124	139	g
1904	明治37年	41000	11700	122	171	g
1905	明治38年	42700	12700	108	98	g
1906	明治39年	43600	11100	116	131	g
1907	明治40年	57900	16700	120	112	g
1908	明治41年	77700	20500	99	75	g
1909	明治42年	74400	23300	101	102	g
1910	明治43年	70900	19800	105	87	g
1911	明治44年	75800	23500	112	106	g
1912	大正1年	77000	25600	94	67	g
1913	大正2年	78700	27300	34	35	g
1914	大正3年	79500	28000	130	128	g
1915	大正4年	84000	32900	123	110	g
1916	大正5年	83800	29400	114	114	g
1917	大正6年	58800	15800	117	98	g
1918	大正7年	52500	13700	105	98	g
1919	大正8年	66300	18600	105	85	g
1920	大正9年	102000	30700	114	51	g
1921	大正10年	110600	25800	117	119	g
1922	大正11年	94900	23700	87	85	g
1923	大正12年	83200	21900	91	88	g
1924	大正13年	74600	22100	89	111	g
1925	大正14年	66600	18500	130	128	g
1926	昭和1年	74600	22100	73	74	g
1927	昭和2年	74900	23400	123	138	g
1928	昭和3年	78300	26300	98	118	g
1929	昭和4年	76200	27800	108	120	g
1930	昭和5年	80200	29900	128	135	g
1931	昭和6年	88200	35800	53	52	g
1932	昭和7年	83100	35400	34	23	g
1933	昭和8年	70500	27400	128	138	g
1934	昭和9年	85300	36700	66	78	g
1935	昭和10年	84100	39400	49	47	g
1936	昭和11年	80000	38200	90	86	g
1937	昭和12年	83600	42200	126	135	g
1938	昭和13年	85600	43600	106	114	g
1939	昭和14年	82100	40200	118	110	g
1940	昭和15年	85500	40100	72	52	g
1941	昭和16年	76200	36100	27	11	g
1942	昭和17年	65500	29600	109	128	g
1943	昭和18年	69900	34000	125	147	g
1944	昭和19年	64300	32200	122	140	g
1945	昭和20年	44500	22000	37	25	g
1946	昭和21年	50000	22800	112	132	g
1947	昭和22年	47900	22000	75	78	g
1948	昭和23年	53000	25900	104	108	g
1949	昭和24年	65900	30100	98	98	g
1950	昭和25年	86100	35400	141	154	g
1951	昭和26年	87800	37200	119	128	g
1952	昭和27年	76500	31400	127	137	g
1953	昭和28年	84500	34600	96	107	g
1954	昭和29年	95400	43800	45	46	g
1955	昭和30年	68900	31300	149	165	g
1956	昭和31年	83900	40700	82	95	g
1957	昭和32年	72700	38000	117	118	g
1958	昭和33年	67200	36500	141	145	g
1959	昭和34年	78100	43400	145	151	g
1960	昭和35年	68000	41000	159	173	g
1961	昭和36年	62800	39400	173	185	g
1962	昭和37年	59300	37800	137	147	g
1963	昭和38年	48800	31400	149	155	g
1964	昭和39年	45500	30000	54	41	g
1965	昭和40年	32900	21400	130	136	g
1966	昭和41年	27100	18500	68	57	g
1967	昭和42年	20200	14500	170	177	g
1968	昭和43年	16100	11800	161	166	g
1969	昭和44年	11400	8220	137	142	g
1970	昭和45年	10000	7420	162	173	b
1971	昭和46年	12600	8910	100	101	b
1972	昭和47年	14300	10300	176	182	b
1973	昭和48年	17500	12500	182	193	b
1974	昭和49年	21400	15200	180	189	b
1975	昭和50年	17100	14000	195	206	b
1976	昭和51年	16600	12700	182	195	b
1977	昭和52年	13400	10500	179	186	b
1978	昭和53年	20300	15000	277	305	b
1979	昭和54年	22300	14000	208	233	b
1980	昭和55年	23100	12800	165	159	b
1981	昭和56年	19000	8530	148	143	b
1982	昭和57年	15500	5530	212	198	b
1983	昭和58年	15300	5570	161	89	b
1984	昭和59年	15000	6070	267	272	b
1985	昭和60年	21300	9190	255	251	b
1986	昭和61年	23700	8920	218	197	b
1987	昭和62年	18000	6530	201	190	b
1988	昭和63年	15300	5960	194	146	b
1989	平成1年	12400	3440	252	252	b
1990	平成2年	12700	3680	260	245	b
1991	平成3年	17500	7090	219	172	b
1992	平成4年	11100	3690	185	159	b
1993	平成5年	7610	2480	112	29	b
1994	平成6年	6740	2170	266	292	b
1995	平成7年	9620	3040	233	232	b
1996	平成8年	11400	3480	192	174	b
1997（平成9）年～1998（平成10）年の間は資料なし						

グラフで見る十勝農業の歴史（4）

表7：豌豆の作付面積と収量

年	年次	北海道の作付面積(ha)	十勝の作付面積(ha)	北海道の収量(kg/ha)	十勝の収量(kg/ha)	出典
1896	明治29年	483	72	110	136	g
1897	明治30年	898	1	79	91	g
1898	明治31年	1080	5	93	85	g
1899	明治32年	1390	19	139	217	g
1900	明治33年	1410	23	158	143	g
1901	明治34年	1640	10	121	190	g
1902	明治35年	2070	3	92	34	g
1903	明治36年	2210	31	149	126	g
1904	明治37年	3760	13	64	172	g
1905	明治38年	2910	48	150	129	g
1906	明治39年	5020	58	121	169	g
1907	明治40年	6290	80	133	112	g
1908	明治41年	6310	96	96	156	g
1909	明治42年	6110	114	113	111	g
1910	明治43年	7740	210	141	99	g
1911	明治44年	10900	451	123	122	g
1912	大正1年	17400	476	142	101	g
1913	大正2年	23800	923	101	94	g
1914	大正3年	26400	955	127	127	g
1915	大正4年	27700	1210	121	90	g
1916	大正5年	35400	1880	113	100	g
1917	大正6年	74700	5580	111	109	g
1918	大正7年	54300	4100	99	92	g
1919	大正8年	68000	6610	83	115	g
1920	大正9年	26700	5200	80	38	g
1921	大正10年	16100	2720	125	122	g
1922	大正11年	33000	6810	97	90	g
1923	大正12年	35600	8640	119	105	g
1924	大正13年	34800	8650	96	100	g
1925	大正14年	28300	9120	100	81	g
1926	昭和1年	29300	10200	116	112	g
1927	昭和2年	38700	14400	112	101	g
1928	昭和3年	45000	17200	98	90	g
1929	昭和4年	40500	15200	102	106	g
1930	昭和5年	26100	10700	128	129	g
1931	昭和6年	32900	14900	101	99	g
1932	昭和7年	40200	19900	59	64	g
1933	昭和8年	41300	20900	93	84	g
1934	昭和9年	42500	20000	128	119	g
1935	昭和10年	46700	21200	73	63	g
1936	昭和11年	38800	17500	75	65	g
1937	昭和12年	29800	13900	80	65	g
1938	昭和13年	21600	9990	109	88	g
1939	昭和14年	20900	8520	87	67	g
1940	昭和15年	17000	7100	85	67	g
1941	昭和16年	6230	2680	65	43	g
1942	昭和17年	3020	1110	97	93	g
1943	昭和18年	2400	1170	85	83	g
1944	昭和19年	1480	837	85	79	g
1945	昭和20年	819	264	63	51	g
1946	昭和21年	2170	1410	81	79	g
1947	昭和22年	2930	1790	64	61	g
1948	昭和23年	3160	1950	94	95	g
1949	昭和24年	3270	1370	89	92	g
1950	昭和25年	7220	2150	117	100	g
1951	昭和26年	8020	4110	127	116	g
1952	昭和27年	8710	4430	126	116	g
1953	昭和28年	5920	2530	114	95	g
1954	昭和29年	8810	4200	122	120	g
1955	昭和30年	17600	6510	131	106	g
1956	昭和31年	12200	5100	69	73	g
1957	昭和32年	10500	4100	116	83	g
1958	昭和33年	7370	1740	130	130	g
1959	昭和34年	8470	1170	158	122	g
1960	昭和35年	14000	1610	142	134	g
1961	昭和36年	10800	1550	160	128	g
1962	昭和37年	7250	848	112	129	g
1963	昭和38年	4750	766	148	132	g
1964	昭和39年	4500	708	120	58	g
1965	昭和40年	4260	689	131	143	g
1966	昭和41年	4820	990	102	69	g
1967	昭和42年	4260	906	133	142	g
1968	昭和43年	3690	827	167	136	g
1969	昭和44年	3190	561	153	139	g
1970	昭和45年	3930	566	157	147	h
1971	昭和46年	3520	680	128	106	h
1972	昭和47年	3000	572	175	146	h
1973	昭和48年	2330	379	170	148	h
1974	昭和49年	2090	409	170	129	h
1975	昭和50年	1770	316	149	140	h

1976（昭和51）年～1998（平成10）年間は資料なし